住友の歴史から(2)

令和2年11月8日(日)11:00~12:00 元別子銅山文化遺産課長 坪井利一郎

1. はじめに

住友商事㈱では、研修テキストとして「住友の歴史から」を使用している。旧別子・銅山峰登山研修を案内するにあたって事前に読んでみると、実に分かりやすく書かれていたので、別子銅山を読む講座で取り上げて、平成28年9月3日に解説した。

別子銅山を読む講座も11年目に入り、振り返ってみると「住友の歴史から」に集約されているのに気が付いた。そこで、住友商事100周年事業で出されたと思われる第四判で再度コンパクトに解説してみる。

2. 本の刊行

昭和52年1月~昭和54年3月 住商ニュースに12回掲載

昭和54年12月 初版本 B6サイズ

表紙は鼓銅図録の南蛮吹きの図

(重版本あり)

平成17年12月 改訂版本 A5サイズ

表紙は開坑二百年記念時に描かれた別子銅山図と 鼓銅図録の南蛮吹き及び棹銅計量の図の線画

平成29年 3月 三訂版本 A5サイズ

住友商事の歴史を加筆

平成31年 4月 四訂版本 A5サイズ

住友商事グループのマテリアティ(重要課題)加筆 住友商事の歴史で、「次の100年に向けて」の項

を独立させて起こしている。

本社がある大手町プレイスイーストタワーの写真

を新たに掲載している。

3. 本の構成

第一部 住友の歴史

別子銅山を読む講座で

第一章 住友精神と「文殊院旨意書」 住友精神、源泉

第二章 業績を固めた南蛮吹き 鼓銅図録

第三章 大阪の銅産業と住友 **住友の大阪(R3年の予定)**

第四章 吉岡銅山と別子(立川)銅山 開坑二百五十年未史話

第五章 金融業への進出と別子・立川の統合 住友の歴史

第六章 住友中興の元勲 広瀬室平 半世物語、宰平遺績、宰平の漢詩

第七章 伊庭貞剛と住友の近代化 幽翁

第八章 事業は人なり 住友の人材 **鈴木馬左也、小倉正恒、古田俊之助追懐録**

第九章 住友の諸事業の誕生 別子300年の歴史

第十章 住友精神と社会貢献 **住友精神**

資料 住友の略年表・住友グループの発展略図

コラム すみともの商標

第二部 住友商事の歴史

第一章 住友の禁を破って誕生した住友商事

第二章 住友商事 大手総合商社に成長

住友の歴史からだから通史としては、 歓喜の鉱山、別子物語 別子銅山の歴史と近代化産業遺産 近代化としては、

別子鉱山目論見書、明治の別子

4. 内容と注目箇所

第一部 住友の歴史

第一章 住友精神と「文殊院旨意書」

- 平成28年には、「反魂丹」について、『薬舗開業当時の「反魂丹」看板の写真が出ている。む「反魂丹」は富山売薬である。江戸時代の立山山伏は、各地に出向いて立山権現の出開帳を行い信仰を広めた。この修験の活動を手本にして広まったのが富山の売薬である。富山藩は薬業を奨励し、西回り航路や飛騨街道を通じて全国に行商に出かけることになった。反魂丹の商売人は各種の心得が示されたが、この商売道徳が富山売薬を発展させた。売薬で得意先に対して常に信用と信頼を重視し、「先用後利」の営業方式を生かした。』と、立山山伏と富山の薬を紹介した本から解説したが、「住友の歴史」(上)には、政友が京都で扱った「反魂丹」は同名の平戸経由の輸入薬品であるらしいので、どうも富山とは別の「反魂丹」である。
- P08 文殊院旨意書の「万事情に入らるべく候う」は、「萬事入精」である。江戸時代には「情」の漢字に「精」の漢字の意味合いも含んでいたと考えられる。現在では、「情」と「精」の漢字の意味を使い分けているので違和感を抱くところである。文化が発達すると言葉は細分化、限定化する。

五か条の訓戒も現在からすると何故と考える項目である。当時は治安を厳しく取り締まっていた支配状況を考慮しなければならない。五人組制度がつくられ、向こう三軒両隣で組織する。租税の完納と防犯のために作られた。犯罪者が

出たときは同罪、税金を払えなければ連帯責任に処された。村でも、租税を払えない者や罪を犯す者が出ないように掟を作った。縁坐制から少しでもまぬかれる防衛策でもあった。そのため、村の掟や申し合わせに従わない者は、「村ハチブ」として、非難され排斥された。

文 殊 院 旨 意 書

商事は言うに及ばず候えども、万事情に入らるべく候う。

- 一、何にても常の相場より安き物持ち来たり候えとも、 様本を知らぬものに候わ ば、少しも買い申すまじく候う、 左様の物は盗物と心得べく候う。
- 一、何たる者にも一夜の宿も貸し申すまじ。また編笠にても預かるまじく候う。
- 一、人の口合い、せらるまじく候う。
- 一、掛商が、せらるまじく候う。
- ー、人何ようのこと申し候えども、気短く、言葉あらく申すまじく候う。何様重ねて、 ねて、 算に申すべく候う。 以上

孟春十日 草名(花押)

草名(そうみょう) - くずした字体の署名。

P08 文殊院・政友が、二代目・友以夫妻に「三社託宣」の遺戒を与えた。

仏教の信仰だけに止まらず、神祇を崇敬し、心清浄に、正直、慈悲を大切にする(三社託宣=八幡・天照・春日)などの解放された宗教観とともに、四恩に対する感恩報謝を心掛けるように述べている。四恩とは、天地自然への恩、国王の恩、父母の恩、衆生の恩。現代では、自然環境・国家公共・先人・同輩への感謝。(四恩はマンサクの四弁で語られる)

三社託宣は、神道が仏教の阿弥陀三尊などの教義を参考にして室町時代に作られる。そして江戸末期まで広く庶民の支持をうけていた。歓喜間歩や歓東間歩の護符に、天照、春日、八幡を掲げるのは、広く信仰されたことの反映を物語っている。家祖・政友の「神仏を敬う」は、この広い世には自分よりも至高の存在があるのだから敬う姿勢を決して忘れてはいけないという婉曲的な教えでもある。神仏習合の時代が反映されている。

8ページには、第2フレーズが書かれていないの、再度全文を掲げておく。

三衬託宣二八幡•天照•春日

天照皇大神宮 正直 (儒教神道の仁)

謀計は眼前の利潤たりと雖も、必ず神明の罰に当る 正直は一旦の依怙にあらずと雖も、終には日月の憐を蒙る

謀計=はかりごと 依怙=不公平 日月=日月灯明仏

(法華経を唱えた仏)

八幡大菩薩 清浄 (儒教神道の勇)

鉄丸を食すると雖も、心穢の人の物を受けず

鉄丸=灼熱の鉄丸

銅焰に座すと雖も、心濁の人の処には至らず

銅焰=燃えさかる火 (鉄丸銅焰は地獄の攻め)

春日大明神 慈悲 (儒教神道の智)

<u>千日</u>の注道を曳くと雖も、邪見の家には至らず 千日=3年 重服深厚たりと雖も、慈悲の室には赴くべし 重服=従順

千日=3年 重服=従順 深厚=親切

(泉屋叢考・第弐輯から)

文殊院訓戒遺戒→家法→営業の要旨の流れ

明治15年の家法

- (第2条 予州別子山の鉱業は万世不朽の財本にして、その業の盛衰は我一家の興廃 に関し、重且大なる他に比すべきものなし。)
- 第3条 我営業は確実を旨とし時勢の変遷理財の得失を計りて之を興廃し苛くも 浮利に趨り軽進すべからざる事。

明治24年の家法と家憲に分離時の家法

営業の要旨

- 第1条 我営業は信用を重んじ確実を旨とし以て一家の塾園降盛を期すべし。
- 第2条 我営業は時勢の変遷理財の得失を計り弛張興廃することあるべしと雖もし苛くも浮利に趨り軽進すべからず。

※昭和3年に社則改正で「我営業」→「我住友の営業」と「住友の」を挿入。

護符の記述

住友別子鉱山史・別冊の15ページには「四ツ留と祭神」の図が出ている。

入口に向かって 右手1 天照皇大神

- 2 八幡大菩薩
- 3 不動明王

入口に向かって 左手1 春日大明神

- 2 山神宮大山積大明神
- 3 薬師如来

正面に大きな護符の箱があり、左右の柱に小さな護符の箱がある。入口の二番目の 左右の柱にも、三番目の左右の柱にも護符の小さな箱がある。ここからマブを「間符」 と書く。

四ツ留と祭神

正面の左右の柱を上に延ばすと、上に横たわっているカツラヲ木に繋がって鳥居となる。正面の大きい護符箱は、大山積神社の鳥居の額である。カツラヲ木は、漢字で書くと葛緒木である。これは、堅魚木、鰹木、勝男木とも漢字で書く。葛緒木をカツラヲキと読んでいるが、カツオキである。神社の棟木の上に並べているカツオ木と

して知られているカツオ木である。カツはカタ(固)の義で、オは鎮める意味の長(オサ)や治(オサム)の意である。坑口の入り口を固め、鎮めるために、坑口の上に乗せている。

歓喜・歓東坑の護符

六本の柱の小さな護符の箱には、天照、春日、八幡、大山積、不動明王、薬師の護 符が納められていて、坑内に入る坑夫を取り巻く安全のバリアとなる。原型は薬師如 来を守る12神将である。12を半減して6つの神仏で坑夫を守る。江戸時代の坑木 は清浄を意味して、亀甲の6角形に成形されていた。

坑口から外に向く矢木は先端が五角に削られている。五大力尊での怨敵退散である。旧別子山中に「江戸時代の坑木」として六角形の部材が登山道横にある。矢木である。

歓喜坑・歓東坑の坑口は、大山積神社の鳥居、鎮守の鰹木、六神仏のバリアの三重 構造となっている。

第二章 業績を固めた南蛮吹き

P11 南蛮人か明国人から南蛮吹の新技術を習得する。

石見銀山ではすでに約100年前に博多の大商人・神屋寿貞が銀抽出の鉛合わせ吹きの灰吹方の技術を入手していた。石見銀山を発見後開発に従事。天文3年(1533)8月、博多から吹工の宗丹と桂寿を石見銀山に招いて海外渡来の銀精錬術である灰吹法によって銀を製錬した。その後、佐渡金銀山に伝播した。日本海側から大阪への伝播の有無は解けないままである。

備中の小泉銅鉛鉱山は、銅とともに鉛を産し、鉛からは銀も取れた。小泉銅鉛鉱山の稼業は南蛮吹の習得の後であるが、小泉鉱山のように銅、鉛、銀を複合して産出する鉱山をヒントにしたかも知れない。

白水なる人物は、中国人ともポルトガル人ともいわれている。仏教の五色では水大(白)で、白は五行では西方を示す。すなわち、白水は西であり、西の人、西から来た人を意味すると考えられる。水大の「大」は、今でいうところの「元素」の意味である。ポルトガル人の来航禁止は寛永6年(1639)である。

五色では	地大(黄)	五行では	黄(中央)
	水大(白)		白(西)
	火大(赤)		赤(南)
	風大(黒)		黒(北)
	空大(青)		青(東)

片桐一男「出島」(集英社新書)に、「キリスト教の布教と貿易活動に従事した 南蛮人にかわって、紅毛人と呼ばれたオランダ商人は貿易に専従して禁教下の 日本に踏みとどまり、200年余りにわたって対日貿易を独占した。」とある。

南蛮人=ポルトガル人 紅毛人=オランダ人

奥村正二「火縄銃から黒船まで」(岩波新書)に、「紅毛とはオランダ人、イギリス人のことである。これにたいしてスペイン人ポルトガル人は南蛮とよんだ。南蛮という語は、日本では戦国時代のあと広く東南アジアをさす言葉としてもちいられたが、ポルトガル人の来航後は、スペイン、ポルトガル等カトリックを信じる南ヨーロッパの人をさすようになった。」とある。南蛮は旧教徒で紅毛は新教徒と区分していることが分かる。紅毛はプロテスタントを信じる北ヨーロッパの人となる。

第三章 大阪の銅産業と住友

P15 大阪で銅吹屋として隆盛の歩みを始めた住友は、寛永13年(1636)に、東横堀川を南に下り、東横堀川と長堀川の交わる島之内の北東隅の鰻谷に家屋敷と銅吹所を移した。たちまちに日本一の銅吹所(銅精錬工場)となった。宝永5年(1704)には棹銅の39%を生産した。

第四章 吉岡銅山と別子(立川)銅山

◆吉岡銅山の稼業挑戦

平安初期開坑であるが、乱掘で荒廃した吉岡銅山の再開発に着手する。大規模 水抜を開削して一流の銅山として起死回生させる。

◆別子銅山の発見

P22 「元禄3年(1690)6月、吉岡銅山に一人の男が情報を持ち込んで来た。」と明治 になってから書かれた垂裕明鑑を基調とした別子開坑二百五十年史話を引きづ って記述している。

> 「元禄3年(1690)秋、田向重右衛門一行は、踏査見分したが、これは切り上り 長兵衛という巧者の堀子からの報告によると伝えられている。」と住友別子高山 史では伝聞としている。広瀬、伊庭、鈴木の総理事3代記の大河では、「伝説に 彩られている。」として映像が始まっている。

切り上り長兵衛は伝説の人

泉屋叢考13輯の「切り上り長兵衛」の序言で「従来の誤謬を逐一訂正して其の真相を 正す。」とある。

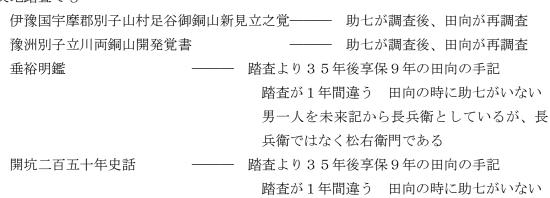
伊豫国宇摩郡別子山村足谷御銅山新見立之覚、豫洲別子立川両銅山開発覚書、豫洲別子御 銅山未来記の中では、「立川銅山で働いていた長兵衛が吉岡銅山の田向に別子山の鉱床を知 らせた。」とある。

しかし、それらの文書は元禄3年(1690)から約70年後の記述である。2~3世代後の文

書となる。

これまでの出版の元は「別子開坑二百五十年史話」である。その中には、長兵衛が廻った鉱山(たからの山ー出羽・三河・美濃・若桜・出雲・石見・播磨・豊前・豊後・薩摩)の全国を回らずに阿波から吉岡に来るという誤記がある。また、「世話になった住友、すぐに知らせた」は不審。しかし、吉岡銅山も水抜きで苦闘、立川銅山にわたっても芳しくなく、財力のある住友でないと別子銅山開発は困難と考えたとの解釈できる。別子銅山は見立てた時はたいしたことはないと考えて2年間言わなかったとも考えられる。この2年間も謎。

実地踏査でも



遠町深鋪で別子鉱山が衰退した時に、過去の栄光をもう一度との願望の中に長兵衛が登場する。資料をつき合わすと時間的につじつまが合わないので、長兵衛については疑義が残る。別子開坑二百五十年史話の影響が大きく、歴史話なのに史実と間違って広まっている。住友別子鉱山史(300年史)では、長兵衛の報告は伝説としている。瑞応寺西墓地に長兵衛の妻子の墓石があるというが、墓碑の戒名の字体と異なる。形式的に続柄を右側に配置しており形式的にも異形である。彫られた文字の行についても中心線が保たれていない。

P24 「元禄7年の夏、別子銅山に不慮の火災が起こり、<u>立川側の放った向い火</u>との間に挟まれて、支配人の助七以下132人が悲惨な殉職を遂げた。」とある。

立川銅山からの向かい火が被害を大きくしたといわれているのは、うわさ話として報告された内容であった。後世へ伝わった誤記である。

元禄7年の大火災で亡くなった132人の内、元締の杉本助七と手代3人は 旧勘場(歓喜・歓東坑から10m下)の沢下に土葬された。当時はここを蘭塔場と 呼んでいた。東朧筆の別子銅山図で道のそばに描かれているのは龍王堂と地蔵 堂である。残る128人の遺骸は、それぞれ手分けして葬られた。火災の少し後 に、縁起の端に山神社(大山積神社)が、現在の蘭塔場跡には観音堂が設けられた。 明治11年(1878)、広瀬宰平が4人の碑石を現在の蘭塔場に上げた。そして大正5年(1916)の採鉱本部撤退で、蘭塔場の墓石は瑞応寺の西墓地に移された。

現在は旧別子の蘭塔場では元禄の大火災で亡くなった殉職者の蘭塔法会が行われている。4人の墓碑を山下に移し、殉職者全員の慰霊の場と変わり、両墓制の「拝み墓」と化した。

別子銅山の記

別子銅山は伊予国宇摩郡の西南隅に盤踞し、東西南の三面は峯岳連亘し、北方は僅に開けて海に臨み、其高さ海面を抜くこと四千尺余。山勢頗る険峻なり。夫れ別子山の鉱業は今を距る二百年前、元禄四年閏八月朔、我十世の祖友信及其子友芳之を創開す。是より先天正年間、祖先理右衛門、明人白水なる者より皷鋳の術を得て、之を子孫に伝ふ。世に之を南蛮吹と称す。蓋し我邦銀銅分析法の嚆矢なり。是より世々製銅を業とするを以て、又諸国に鉱山を開く。然れども其継業は皆数十年に過ぎず。唯別子は開坑以還時に天災地変に遭遇するも、幸にして此業を継承し二百年の久しきー日の如し。今や世歩の開明に伴ひ採鉱に製錬に洋法の長所を取り、以て旧習の短を補ひ、今日あるを致せり。願ふに本邦に於て鉱業の久しきに渉るもの固より少なからずと雖も、我別子山の如く二百年来、子に孫に相伝へ其業を保続するもの未だ曽て聞かざるなり。是詼山鉱源の深きに因ると雖も、亦明治聖代の徳沢と祖先の余慶に頼らずんば何ぞ此に至らん。茲に別子山開始以来二百年の慶典を拳ぐるに由り其概略を記すこと斯の如し。

明治二十三年九月一日 二十世孫住友吉左衞門 誌

A Short Sketch of the History of the Copper Mines of Besshi

The Besshi Mountains, where these Mines are situated, occupy the south western corner of Umagori, Iyonokuni. The Mountains are upwards of four thousand feet above the level of the sea, and their characteristic features are steep declivities and rugged peaks on every side, except the north, which faces the Inland Sea.

Copper Mining at Besshi was first begun on the 1st. August in 4th. year of Genroku(two

hundred years ago) by Tomonobu, my ancestor of the 10th. generation and Tomoyoshi, his son. But, even earlier than that date, (in the year of Tensho) Riyemon, one of my ancestors obtained Liquation Process from a Chinese named Hakusui, and bequeathed it to his posterity. This process has been known, since, by the name of Nanbanbuki, and was probably the beginning of the Reduction of Silver from Copper Ores in our country.

During the many generations we have been engaged in Mining and Refining Copper, our ancestors have opened and worked mines in many provinces, but none of them were good enough to operate upon for a very long period. Fortunately, however, we have been able to continuously work the Copper Mine of Besshi for two hundred years.

Difficulties, of course there have frequently been, but none that we have found it impossible to overcome, and at the present time, after two hundred years of hard and prosperous working, our mines seem to be richer and better than ever.

This, of course, is greatly owing to the progress of civilization, and the consequent adoption, at the Copper Mines of Besshi from Foreign Countries, of their newest and most superior methods of Mining and Metallurgy.

Although, no doubt, there are many mines in various parts of our country that have been doing good work for long periods, yet, the fact that the Copper Mines of Besshi have been owned and successfully operated upon by the heirs of one family for two hundred years without once changing hands, is, we venture to think, almost unique; and, though it is quite clear that this long continuous prosperity has been in a large measure owing to the natural mineral wealth of our mines, yet I must be allowed to congratulate myself upon the facts, (I) that the foresight, diligence and perseverance of my ancestors were most praiseworthy and beneficial, and (2) that this glorious reign of Meiji has enabled me to make their good work so much more perfect.

It is in honor of the two hundredth anniversary of the working of the Copper Mines of Besshi, which I am now intending shortly to celebrate, than I have taken the liberty of giving you this short sketch of the history of our industry; and, in doing so, I beg of you a continuation of your patronage.

1st. September, 23rd. year of Meiji. KICHIZAEMON, SUMITOMO, 20th, Descendant of the Family of Sumitomo.

【意訳】

別子銅山の歴史の概略

鉱山が位置する別子の山々は、伊予国宇摩郡の西端を占めている。山々は海抜 4000 フィートで、特徴は北を除いた各面の険しい勾配と起伏のある頂であり、瀬 戸内海に面している。

別子銅山は(約200年前の)元禄4年8月1日に、私の10代前の先祖である友信

と、息子の友芳によって初めて開かれた。しかし、それより早い時期(天正年間)に、私の先祖の一人の理右衛門が、白水という名の中国人から冶金の術を学び、子孫に伝えた。それから、その手法は南蛮吹という名で知られ、おそらく我が国での銅から銀を還元する嚆矢である。

我々が銅を採掘し精製してきた何世代もの間、我々の祖先は諸国に鉱山を開き、 経営してきたが、長期間経営するのに十分良質なものはなかった。しかし幸運にも、 我々は200年間別子銅山を継続して経営することができた。

もちろんしばしば困難なことはあったが、克服が不可能であると思ったことはなかった。そして現在、困難と繁栄の200年の後に、我々の鉱山はかつてより豊かで良いものになったようである。

もちろんこれは、文明の進歩と、別子銅山において、採掘と冶金の最新で最良の 技術を外国から受け入れた結果に負うところが大きい。

とはいえ、我が国の様々な場所で長年良い経営をしている鉱山が多くあるのは 疑いないが、別子銅山が一度も他の手に渡ることなく 200 年間一家族の後継者に よって所有され、首尾よく経営された事実は、大胆にも我々が思うに、ほとんど類 のないことである。そして、こうした絶え間ない長期間の繁栄は、我々の鉱山の自 然の鉱物の豊かさに負うところが大きいということはまったく明らかであるが、 私は以下の事実を祝することを許されるであろう。(1)我が祖先の先見の明、勤勉、 忍耐は最も称賛に値し、有益であったこと、(2)この栄光の明治の世が、私の素晴 らしい経営をさらに完璧にすることを可能にした。

現在、私が間もなく祝おうとしている別子銅山経営 200 周年を記念して、私は失礼ながら我々の産業の歴史の概要をあなた方に伝える。そしてそうする中で、あなた方の継続的な支援をお願いする次第である。

明治23年9月1日 住友吉左衛門 住友家第20代当主

第五章 金融業への進出と別子・立川の統合

第六章 住友中興の元勲 広瀬宰平

明治新政府から別子銅山の稼業継続を獲得し、フランス人技師のルイ・ラロックを雇い「別子鉱山目論見書」を作成し、別子の近代化に尽くす。

第七章 伊庭貞剛と住友の近代化

「君子財を愛す。之を取るに道あり。」を座右の銘とし、環境の世紀と言われる21世紀を先取りする。製錬所の四阪島移転、別子の植林。

第八章 事業は人なり 住友の人材

◆偉大な統率者・鈴木馬左也

経営方針は「条理を正し、徳義を重んじ、世の信頼を受ける」「国益を先にし、 私利を後にする」。国家優先の信念として「正義公道を踏んで、国家百年の事業を 計らねばならぬ」と言っていた。

◆女房役に徹した・中田錦吉

58歳で総理事になると定年制を制定した。生保界への進出、金融機関体制の確立に尽くす。

◆工業化のリーダー・湯川寛吉

ドイツ語にすごく堪能であった。鉱山と金融の住友を工業経営に乗り出させた。

◆住友そして国に・小倉正恒。

住友の近代化を達成事業の興隆を極めた。国務大臣に請われて住友を去る。

◆住友を守り抜く・古田俊之助。

広瀬以来の住友生え抜き、技術職。終戦処理で住友本社を解体した。

語彙

広瀬宰平

- ・報いんと欲す、積年金積の恩。
- ・問わんと欲す国家経済のこと。
- · 逆名利君、謂之忠。

伊庭貞剛

- ・君子財を愛す、これを取るに道あり
- ・そもそも諸子が初めてこの山に来るや、決して偶然にあらず、必ず目的あり、目的とは 何ぞや、即ち勤勉以て国家を益し、倹約以て己が栄光を計ること、是なり。
- ・小生は馬鹿な仕事が好きなり。
- ・五ケ年の跡見返れば雪の山 月と花とは人に譲りて。
- ・植林こそが、私のほんとうの事業。
- ・生命をかけて判を押さなければならない書類は、二度か三度くらいのもんだ。
- ・事業の進歩発展にもっとも害するものは、青年の過失ではなく、老人の跋扈である。老 人も青年も共に社会の勢力に相違ないが、その役割をいふと、老人は注意役、青年は実 行役である。
- ・言葉は八分とどめて、後の二分は、向こうで考えさせるがよい。分かる者には言わずと も分かる。分からぬ者には、いくら言っても分からぬ。
- ・人の仕事のうちで一番大切なことは、後継者を得ること、その仕事を引き継がせる時機 を選ぶことである。
- ・このまま別子の山を荒蕪するに播かせておくことは、天地の大道に背くのである。どうかして濫伐の跡を償ひ、別子の全山を旧のあおあおとした姿にして、之を大自然に返さなければならない。
- ・もしその事業が本当に日本の為になるもので、しかも住友のみの資本では到底成し遂げられない大事業であれば、住友はちっぽけな自尊心に囚われないで、何時でも進んで住友を方下し、日本中の大資本と合同し、敢然之を造上げようという雄渾なる大気魄を絶えず確りと蓄えていなければならない。

鈴木馬左也

- ・自分は正義公道を踏んで、皆と国家百年の仕事をなす考えである。
- ・煙害に対する損害を賠償する額以上も支出して、施設する覚悟である。

第九章 住友の諸事業の誕生

◆事業分化の花開く

住友は明治維新に際し、別子銅山の経営に全力を注ぐ。それにつれて各種事業が 分化、新設されて財閥が形成される。

工鉱業部門からは、住友重機械工業(株)、住友石炭鉱業(株)、住友金属鉱山(株)、住友 金属工業(株)、住友電気工業(株)、住友化学工業(株)、日本板硝子(株)、住友セメント (株)、住友建設(株)、住友ベークライト(株)、住友軽金属(株)。

◆住友商事の誕生

大阪北港地区で別子銅山での飯米確保から耕地を買う。時勢の変化で工場が建っていく。大阪港の発展、開発から大阪北港㈱が生まれ、住友土地工務㈱となり、 住友建設産業㈱に引き継がれ、商事部門を設けて発足して住友商事㈱となる。

第十章 住友精神と社会貢献

◆確実を旨とし浮利に趨らず

住友精神は「文殊院旨意書」までさかのぼる。

明治15年(1882)制定の住友家

明治 24 年(1891)には、家法と家憲に分かれる。

昭和 3年(1928)には、社則で営業の要旨を制定する。

第1条 我住友の営業は信用を重んじ確実を旨とし以てその警査隆盛を期すべし。

第2条 我住友の営業は時勢の変遷理財の得失を計り弛遠興廃することあるべしと雖も苛くも浮利に趨り軽進すべからず。

- ※昭和3年、社則で制定。(正文そのまま使っているのは住友商事だけ。)
- ※昭和39年、英訳される。(昭和52年、英訳が改訂される。)
- ※昭和40年1月、津田久社長が、英訳付きの毛筆の営業の要旨を社長室に掲げるとともに、国内外の全店舗に掲げる。
- ※昭和48年12月、津田久元会長は、住友商事経営活動憲章の冒頭に営業の要旨を掲げる。

◆自他利他公私一如

これは、「住友の事業は、住友自身を利するとともに国家も利し、社会を利するほどの事業でなければならない。」というものである。仏教用語で、「自己の仏道修行により得た功徳を自分が受け取るとともに、他のためにも仏法の利益をはかる」という意味である。悟りを開き如来に成れるにもかかわらず、この世にとどまり衆生を救わんとの誓いを立てるとともに、己もなお修行に励む菩薩行である。観音菩薩、地蔵菩薩、普賢菩薩、勢至菩薩、弥勒菩薩など。

初代総理事・広瀬宰平は、別子銅山の近代化を推進した。当時、自分たちが儲けるだけでなく国民と利を分かち合うとして、新居浜に洋式製錬所を開設し、地域が工業都市として発展する基礎を築いた。

第2代総理事・伊庭貞剛も、「住友の事業は住友自身を利するとともに、国家を利し、 且つ社会を利する底の事業」という方針を執った。

第3代総理事・鈴木馬左也も、「徳を先にし、利を後にする。徳によって利を得る。」 という自説を語っている。

新居浜事業所の支配人・鷲尾勘解治は、別子銅山の鉱量が後17年分しかないことが 判明したとき、地方後栄策を提唱、実践して今の工都・新居浜の原型を作った。

◆企画の遠大性

住友精神の特性として「企画の遠大性」がある。広瀬、伊庭、鈴木総理事が常に 口にしていた「国家百年の事業を計らねばならぬ」ということである。

P76 コラム すみともの商標

「菱井桁」は、屋号の「泉屋」に由来する。泉の字は清冽な湧水が尽きないこと、 貨泉に通じて良縁である。

住友井桁の商標登録年はいつか? → 明治18年

サイズ規定はいつか?

→ 大正 2年

住友井桁の一辺の凹凸凹凸凹の比は、 $1 \cdot 4 \cdot 2 \cdot 4 \cdot 1$ で、マークの対角線の縦横は、 $12 \cdot 16$ である。菱形は三辺が3:4:5の直角三角形で作っている。 3、4、5は「ピタゴラスの数」の一つである。5、12、13もピタゴラスの数。 直角三角形に無限にある。

$X^2+Y^2=Z^2$ の時のXYZが整数なのをピタゴラスの数という

ちなみに、寺院床の二等辺三角形から発見したとのエピソードで有名なのが ピタゴラスの定理。直角二等辺三角形の斜辺の上の正方形の面積は、他の2辺の上 の正方形の面積の和に等しい。

三辺が3:4:5の直角三角形の高さと斜辺との比は、1.666666・・・で、 黄金比と白銀比の間となる。また住友井桁の菱形の長対角線と一辺との比は、1.6 て、黄金比の1.618033・・・の近似値を示す。それらの事を内在しているか らか、住友井桁はバランス良く、美しく見える。

南米ボリビアのウユニ塩湖の湖面が鏡になって空が写り、天地和合の不思議な空間を作り出している。住友井桁も、長対角線で線対象で天地和合となる。伊庭貞剛が「このまま別子の山を荒蕪するにまかせてくことは、天地の大道に背くのである。どうかして濫伐のあとを償ひ、別子全山を旧のあおあおとした姿にして、之を自然に返さねばならない。」と述べた「天地の大道」も読み取れる。

色でもってシンボライズする行為は、文化レベルで言うとものすごく高度なこと

である。各社のカラー。

 商事
 鉱山
 重機
 化学
 共電
 林業
 不動産
 建設
 生命

 浅葱
 水
 青
 赤
 紫
 緑
 黄
 茶
 朱

住友井桁の使用は暗黙の契約。昭和27年(1952)、財閥商号使用禁止措置が解除になった時、社長会で住友井桁の使用を家長に願い出た。返事は「使わないでください。」 再度願い出たら、黙られた。

「菱井桁」は、屋号の「泉屋」に由来する。泉の字は清冽な湧水が尽きないこと、 貨泉に通じて良縁である。

5. おわりに

平成29年3月の三訂版本がを、旧別子・銅山峰登山研修に出かける度に見返した。 令和2年11月に入手の「住友の歴史から」は、元号が令和に変わる直前の平成31年4月に、住友商事㈱100周年事業で発刊された四訂版本で、住友商事グループのマテリアティ(重要課題)が加筆されていた。住友商事の歴史で、「次の100年に向けて」の項を独立させて起こしている。昨年7月に講演した本社がある大手町プレイスイーストタワーの写真を新たに掲載している。

表紙の旧別子の足谷を歩くこと133回を数える。西赤石山はシンボライズされて崇高に聳えて描かれている。青い空の日を思い出す。あの日は、気持ち良い風が吹いていた。付句した娘さんがいた。

風わたる 銅山峰に 歓喜声 (竹舟) 歴史辿りて 遂に来りぬ (さやか)